

捧手洗上、頗無便宜、兩度可役、  
歟、三物一度重可用立、可惟、  
殿下、○中

十二月十日丁酉、早旦着行事所、大嘗會威儀御物并副御調度内覽

大嘗會悠紀所

注進御物目錄事 ○中

手洗二口、打敷一帖、長七尺、五幅、貫簀一枚、椽三口、○中

白銅物 ○中 手洗臺二脚 ○中

大嘗會悠紀所

注進 副御調度事 ○中

手洗一口、在打敷一帖、長七尺、三幅、貫簀一枚、椽一口、

〔伏見院御記〕正應元年十月廿一日辛酉、今日爲禊除幸河原頓宮、○中 主殿寮昇御手水案立巽角砌、

○中 手洗上乍置貫簀聊洗手、不嗽也

〔空穂物語 菊の宴〕かくてきさいの宮賀、正月廿七日にいでくる、おとねになんつかうまつり給ける、まうけられたるもの、○中 御てうづのてうど、○中 ちんをまるにけづりたるぬきす、○下

〔伊勢物語〕昔男女のもとに一夜いきて、又もいかず成にければ、女の手あらふ所にぬきすをうちやりて、たらひのかげに見えけるを、みづから、

わればかり物おもふ人は、又もあらじとおもへば、水の下にもありけり

〔秋の夜の長物語〕夜あくれば、又きのふの所に行て、御坊のかたはらにたゝすみたるに、わらはのいとよげなるが、ぬきすのまたの水すてんとて、門の外まで出たり、○下

〔新撰六帖〕あした

老にける程もはかなし朝ごとのたらひの水にかぶ面影